

## 博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分野	作業療法学分野
学籍番号	16S3005	院生氏名	井上 忠俊
通学キャンパス	福岡キャンパス		
論文題目	地域在住高齢者の認知機能低下及び転倒における関連要因の検討 - 歩行時の眼球運動と歩行の変動性に着目して -		
審査結果 (枠で囲む)	合格		不合格
<p>&lt;審査結果の要旨&gt;</p> <p>1. 主論文について</p> <p>本研究は、地域在住高齢者を対象に、認知機能低下と転倒の危険因子を明らかにする目的で行われたもので、①認知機能の違いによる歩行時の眼球運動と歩行変動を解析した研究、②転倒歴と歩行時の眼球運動や歩行変動の関連性を解析した研究、の2つからなっていた。研究方法は、国際医療福祉大学研究倫理委員会の承認（承認番号 16-Ifh-030）を得て実施しており、開示すべきCOIも存在していなかった。</p> <p>研究1は、研究協力者の高齢者84名（男性22名、女性62名、平均年齢78.4±5.9歳）を対象に、MMSE24点をカットオフ値として認知機能の違いで2群に分けて、其々の群での通常歩行とdual-task(DT)での歩行を行った時の眼球運動と歩行姿勢の変動および精神・運動機能を検討したもので、認知機能低下群では、DT歩行時に眼球運動速度の低下や歩行姿勢の変動の増大が認められた。</p> <p>研究2では、研究協力者98名（男性28名、女性70名、平均年齢75.8±6.0歳）を対象に、転倒歴の有無で眼球運動と歩行姿勢の変動および精神・運動機能を検討したところ、転倒歴のある群では、障害物歩行時の眼球運動速度の低下や歩行姿勢の変動の増大が認められた。</p> <p>以上の結果から、高齢者の認知機能の低下や転倒予防には、注意機能に焦点をあてた評価や訓練が必要であり、眼球運動検査や歩行時姿勢変動がリスク検出に鋭敏である、と結論づけている。</p> <p>本研究の新奇性は、転倒評価法として、DT歩行や障害物歩行など注意機能への負荷の高い環境を歩行する際の眼球運動検査と歩行変動が鋭敏なことを明らかにした点で、今後の地域在住高齢者の転倒予防評価法に関する政策や福祉活動に貢献する研究として評価できる。</p> <p>2. 審査経過について</p> <p>審査に先立ち副論文の審査を行い、必要要件を満たしていることを確認した。審査会は1回実施し、初回審査で用語の定義、測定プロトコルの明確化、論文題目と研究内容との整合性、結果と考察および研究限界の整合性について問題ないことを確認した。ただし、幾つかの点で論文に修正が必要であったため、後日数度の論文修正の提出を求め、最終的に適切に修正したことを確認した。</p> <p>3. 口頭試問の結果</p> <p>口頭試問においても適切に研究内容について回答し、この分野の知識を十分に得ていることが確認できた。</p> <p>以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が著者に博士（保健医療学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。</p>			
論文審査担当者	主査	後藤 純信	
	副査	深浦 順一	
	副査	小賀野 操	